

1 2. 《王朝文学と武蔵国》

平安中期、天皇側近の貴族が実権を握ります（摂関政治：注1）。このとき世界に誇れる王朝文学が誕生します。そこでは、武蔵国はどのように取り上げられているのでしょうか。

1020年（寛仁4）のこと、都で流行している「源氏物語」（注2）に憧れた少女が、上総国から父と一緒に帰京します。そのとき武蔵国の様子が「更級（さらしな）日記」（注2）に書かれています。

それによれば、武蔵国は、騎手の弓が隠れるほど高く、アシやオギが生い茂っていました。その草むらを分け入ると廃墟となった寺があり、そのわけを人に聞いて、“その昔、武蔵国竹芝（現在の港区三田付近）から衛士として宮中に出仕していた男が、皇女に頼まれ駆け落ちしたこと、朝廷は、それを認め、竹芝の男に武蔵国を所領させ免税することにしたこと、寺は皇女のために建てた家だったこと、2人の間にできた息子に武蔵姓を賜ったこと”が紹介されます。

この人伝ての昔話は、皇族男子の「東下り」とは真逆であり、このヒロイン物語に、さぞかし女性たちは勇気をもらいロマンを掻き立てられたことでしょう。

また、「枕草子」（注2）では、様々な“いとをかし”の例を書き連ねています。その中で井戸の例として、武蔵野の「ほりかねの井」が紹介されています。これは、すり鉢状に掘削した“まいまいず井戸”のことで、崩れやすい関東ローム層から地下水を取水する工夫に、“いとをかし”と感じたのだらうと思います。

注1：当時は、天皇の幼少時に代行する摂政や、天皇を補佐する関白が置かれ、藤原氏がこのポストを独占して栄華を誇りました。

なかでも、権勢を誇った藤原道長(生没年:966-1028)は、1018年に「この世をば わが世とぞ思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば」と詠んでいます。

童謡「金太郎」でおなじみの坂田金時は、藤原道長の側近の部下という設定です。江戸時代に創作されたそうですが、この設定からは、道長の下に多種多彩な人材が集まっていたことが想像できます。

注2：主要な平安王朝文学は、以下の通り。

武蔵国に直接関係する話は極めて珍しい。

名 前 作 者 名 (生没年)

蜻蛉日記 藤原道綱母 (954—974 年)

源氏物語 紫式部 (生没年不明)

枕草子 清少納言 (966—1025 年)

更科日記 菅原孝標女 (たかすえのむすめ:1008—1059 年)

写真は、①まいまいず井戸（東京都史跡五ノ神まいまいず井戸：「はまだより blog まいまいず井戸」より一部転写）、②菅原孝標女(馬上の女性：石山寺縁起絵巻 全集日本の古寺第5巻より 細見が一部を転写)、③更級日記の行程図(更級日記関連地図HPより一部転写後、細見加筆)

①



②



③

